

消された吉備王国④

～吉備と委奴国、物部氏～

経営学部 経営学科 志野敏夫

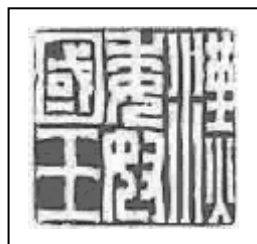
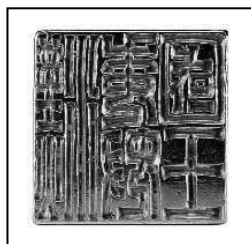
- セールスポイント： ① 古代吉備はヤマト政権にとって欠くことのできない存在だった。
② 中国側史料からわかる「委奴国」という史実を記紀神話に探り、一つの仮説を立てた。
③ 農業世界とされることが主流の弥生日本への理解を変える。

1. 研究目的

近年の考古学上の成果から、吉備・岡山地方がヤマト政権にとって重要な位置を占めていたことが分かってきているが、このことを文献史学の方面から考察している。これまで本OUSフォーラムでこの問題について、3回にわたり記紀から消された吉備王国を追ってきた。今回の研究では、金印「漢委奴国王」の分析を出発点として、記紀神話の謎に対して仮説を立て、それと吉備とがどうかかわるかを推測した。

2. 金印「漢委奴国王」のナゾ

その印文「漢委奴国王」は一般に「漢の奴の国王」と読んでいるが、漢の礼制、官僚制から考えるならばそれは間違いで、「漢の委奴国王」と読まなければならない。委奴国の所在は糸島・博多近辺であろう。おそらく「委奴」国



は、陸の匈奴に匹敵する海の委奴と認識され、金印は漢王朝との朱印のような役割を果たしたのではないかと推測されている。漢の北郊后土祠という祭祀を背景に繁栄していた委奴国は、「倭国大乱」によって五斗米道の卑弥呼に取って代わられる。その時に金印が志賀島に埋納されたのである。

3. 記紀神話のナゾ

一方、記紀神話中で根本的ともいえるナゾであろうと考えるのが、天孫降臨でなぜ出雲に降臨しなかったのかということである。それは、しなかったのではなく、できなかったのはいか。つまり、上述の“史実”を記紀神話に当てはめて委奴国＝高天原という仮説を考えるならば、倭国大乱によって出雲に行く予定であった委奴国＝高天原一族は得意の海路を行けず、陸路をさまよって宮崎にたどり着いた。着いた高千穂を良しとした理由は「韓国や、笠沙に繋がるから」であった。

4. 海洋世界の弥生と吉備

海洋国委奴国は、当然大陸の先進技術と共に拠点を列島各地に持っていたであろう。それらが、笠沙であり、物部が降臨した大阪であり、また吉備ではなかったか。物部氏は「八十物部」



といい、各地（吉備を含め）に支族がたくさんいた。

フィジー共和国旧首都レブカにおける住居の特徴と変遷についての研究

工学研究科 システム科学専攻 福本雅美（江面研究室），江面嗣人
北海道大学 観光学高等研究センター，JICA

- セールスポイント： ① レブカにおける歴史的建造物の特徴について明らかにした。
② 南太平洋におけるコロニアル建築の特徴と変遷の一部を明らかにした。
③ レブカの歴史的建造物の保存修理方針が明らかになった。

1. 研究目的

フィジー共和国旧首都レブカは2013年にユネスコ世界遺産に登録され、一部の研究機関による調査が行われた。ICOMOSが提出した推薦理由は、イギリス植民地時代の建築物が多く残っており、南太平洋の発展を知る上で重要であるためとされている。しかし、実際のレブカにおいて建築年代が判明している建物は少なく、保存や修理のための方法も確立されていない。そこで本研究ではレブカに残る歴史的建造物、特に住宅の特徴と変遷を明らかにすることを目的とした。

2. 住居の間取の特徴と変化

レブカの町の配置を Fig.1 に示す。レブカはオバラウ島の東に位置し、海沿いのビーチストリートに商店が並ぶ。また、住宅は町全体に広く分布している。現地にて住居等の実測調査を行い、98 件の建物の図面を作成した。

Fig.2 は戸建型住居の代表的な間取である。建物は7割が木造で、柱や壁材は統一規格のものをを用いており、近隣諸国でも同様の形状の木材の使用が確認できる。レブカには主として専用住居である戸建型と、商店や倉庫を兼ねた町家型、公共建築などの様々な建物が存在する。戸建型はバンガローと呼ばれる形式で、コロニアル建築の特徴が確認され、住居は建築当初の身舎は部屋数が少なく、周囲は開放されたベランダであったことが判明した。利用方法にはフィジーの伝統的な住居であるブレの名残りが確認され、現地の既存文化との繋がりが明らかになった。

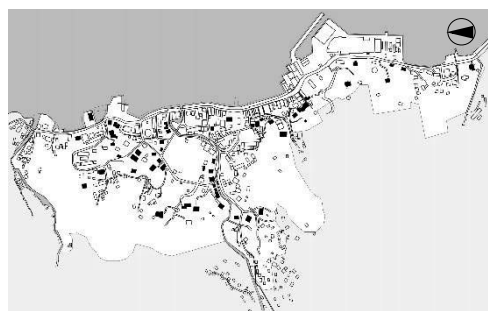


Fig. 1 レブカの町

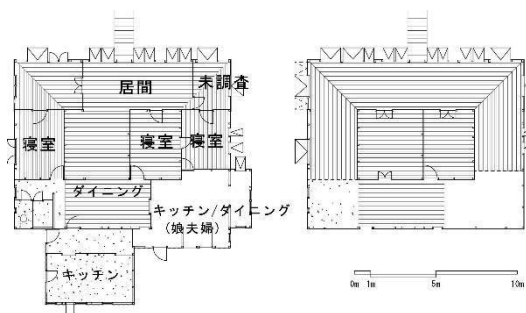


Fig. 2 戸建型住居

3. 今後の課題

フィジーはハリケーンの被害が多く、特に2016年のウィンストンによる被害は甚大であった。復興は進んでいるが、国からの補助は十分ではなく、建物の修理に関する方針も定まっていない。本研究によって、レブカの歴史的建造物の特徴と価値が明らかになり、修理方針も立てられる状況となった。今後は住民が文化財に対して何を望むのかを確認し、歴史的建造物の修理方法等について協議し、フィジー政府と共にレブカの歴史的建造物の保存・活用について考えていきたい。

女性の暮らしと出生率から見る都道府県の格差

経営学部 経営学科 三原裕子, 大田 靖

- セールスポイント： ① 出生行動と女性の暮らしの関係の解明
 ② 出生行動に関する議論の整理
 ③ 少子化に関する政策提言

1. 研究目的

格差が少ないと言われてきた日本において、近年、地域間および地域内におけるさまざまな格差が注目されている。その代表的なものとして所得格差、健康格差、教育格差などがあげられる。日本における地理的や社会的な条件の違いは、人口の規模や雇用形態などを通じて地域間の雇用格差や賃金格差など、さまざまな経済格差を引き起こす原因となる。本報告では特に、橋木(2017)を参照しながら地域間での出生率の差異について、女性を取り巻く環境から整理する。

2. 出生率に関する先行研究および現状

Becker(1973)以降、経済学の観点から女性の結婚行動や出生行動に関する研究が盛んに行われている。Doepke and Tertilt(2009)では男性よりも女性のほうが子への選好が強いことが示され、Attanasio and Lechene(2002)では女性の所得と子どもの衣服や食料に対する支出額との間には正の相関があることが示されている。これらの研究は、女性をとりまく社会的な環境に出生率は依存しうることを示唆している。

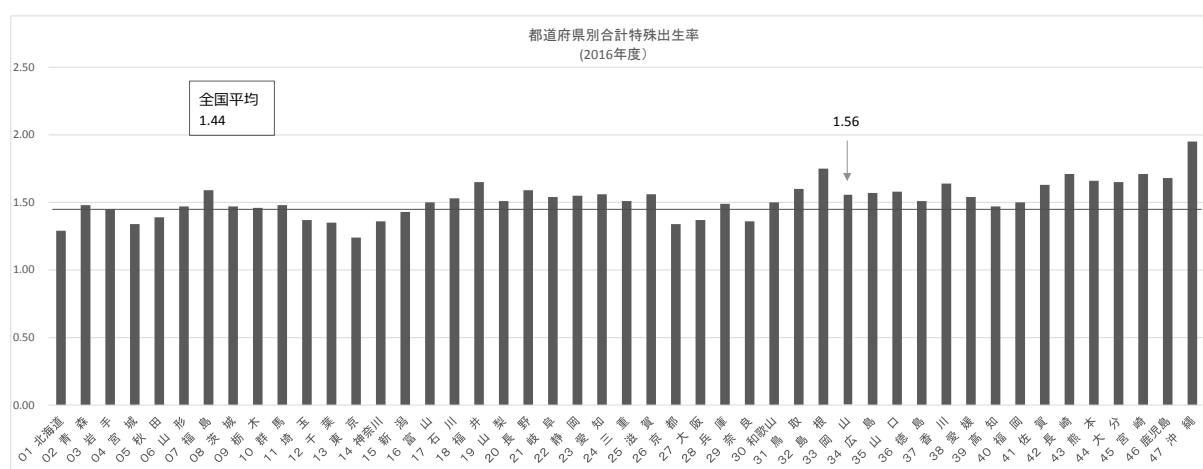


Fig.1 都道府県別出生率

出所：「人口動態調査」(厚生労働省)

Fig.1 は、2016 年度の都道府県別出生率を示したものである。最も出生率が高いのは沖縄県、次いで島根県であり、最も出生率が低いのは東京都、次いで北海道である。ここから、都市部ほど女性の社会進出が盛んで、そのため子を持つための機会費用が高く出生率が低くなる、という Becker(1973)と同様の傾向が見て取れる。

3. 方法

女性に関連のあるさまざまなデータを都道府県別に整理を行う。さらには、それらのデータを用いて回帰分析を行うことにより、出生率に影響を及ぼす要因を明らかにする。

8月ジャーナリズムと新聞

経営学部 経営学科 八木一郎

- セールスポイント： ① 8月ジャーナリズムの現状
② 各新聞紙面の比較によって見える編集方針の差異
③ 戦後72年を経て、戦争や平和をどう伝えていくかの展望
-

1. 研究目的

新聞、テレビなどのマスメディアの報道で、8月に戦争や平和をテーマにした報道が集中的に行われる状況を称して「8月ジャーナリズム」という。6日の広島、9日の長崎の原爆忌に続いて15日には終戦記念日を迎えることから、これらのメモリアルデーにちなんで、大量の記事が報道されることは当然ともいえる。そこで、新聞紙面を対象に実際にどれだけの分量の報道が行われているのかを数量的に整理し、72年目の「8月ジャーナリズム」の全体的な傾向や特徴を検証した。

2. 報道量と掲載面

調査は全国紙3紙（朝日、毎日、読売）と地方紙1紙（山陽）の計4紙について、今年7月と8月の2カ月間の岡山県内で販売されている各新聞朝刊の紙面を調べた。72年前の戦争に関するすべての記事を対象に、各紙の掲載面ごとに記事量をチェックした。1面すべてを使った特集面はそれだけで1本とカウントした。

その結果、7月は朝日17本、毎日26本、読売4本、山陽9本。8月は朝日92本、毎日122本、読売75本、山陽78本だった。原爆投下の6日と9日、玉音放送が流れた15日と8月前半の激動の歴史に照らしてみれば、8月の報道量が多いことは容易に想像できるが、7月と比べて、これほどの大幅増は予想を超えるものだった。

同じ全国紙でも、毎日と読売を比較すると、7月は6.5倍、8月は1.62倍と毎日が読売を上回っており、かなり落差があることもわかる。

8月の掲載面でみると、社会面（第1社会、第2社会）で全体の3～4割を占め、1面掲載も1割前後。くらしや文化といったフィーチャー面での掲載は読売、山陽が目立った。特集面は読売の8面が最多。報道量が最多の毎日の場合、節目の日には1面、社会面をはじめ、社説、1面コラム、さらにオピニオン面、投書欄など多くのページに戦争関連記事が載った。地方版（岡山版）への記事掲載は山陽が7月6本、8月15本と他紙を圧倒しており、地元紙の特性を発揮していた。

3. 「8月ジャーナリズム」の今後

戦争が終わって72年。あの戦争の惨禍を伝え、平和の大切さをどう守り続けていくかが問われている。各紙の企画記事にも、その思いが見て取れる。「ヒロシマを伝える」「語り継ぐ 受け継ぐ」（以上読売）、「つなぐ」（山陽）、「ヒロシマ伝えて」「忘れゆく国で」（以上毎日）、「記憶を背負って」「戦死と向き合う」（以上朝日）。戦争を繰り返さないよう平和を願って記事を書き続けることはジャーナリストの使命である。ただ、報道量の多さだけで、その役割が果たせるというものでもない。今、取り組むべきことは戦争を経験した人たちの生の証言を記録し、伝えること。戦争を知らない世代が増え続けていく中で、今しかできないことがある。